

大阪府立中之島図書館棟札(旧称大阪図書館)に記された 現場係木内真太郎とドーム天窓 (写真1) について

ステンドグラス工房 我羅

金田 美世 博士(工学)

はじめに

『中之島百年—大阪府立図書館のあゆみ』(1) 281 頁に「“棟札の発見” 1998 (平成 10) 年 9 月、正面玄関天井の変状調査を実施中に調査員が、天井の下地枠上に埃をかぶった中之島図書館創建当時の棟札を発見した」とある(写真 2)。発見された棟札は、翌年 5 月 13 日付で国の重要文化財に追加指定されている。棟札は、檜材で作られ外形寸法、高さ 1488 mm、幅 362 mm、厚さ 34 mm の尖塔型、五角形である。

続いて「施主住友吉左衛門の名に加えて、工事顧問として辰野金吾(2)、技師長野口孫市(3)、技師日高胖、現場主任久保田小三郎……」とあるが、現場係員および棟札裏面についての記載はされていない。棟札の下段に記された木内真太郎と役職の現場係は、今まで語られることがなかったが筆者の論文から注目されることとなった。

筆者の研究テーマである「日本の近代建築ステンドグラス」の諸資料の中に大阪図書館建築工事に関する木内真太郎の文章が記されていた。筆者は、近代における代表的なステンドグラス製作者、および「宇野澤組ステインド硝子製作所」(4)の創立者の一人である木内真太郎が、遺した資料(以下、木内家資料)を調査研究しており、1907(明治 40)年から大正時代末までの木内の業績を論文等で報告をしている(5)。

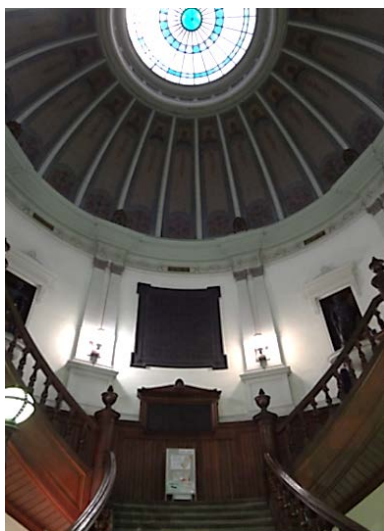


写真 1 中央ドーム 天窓

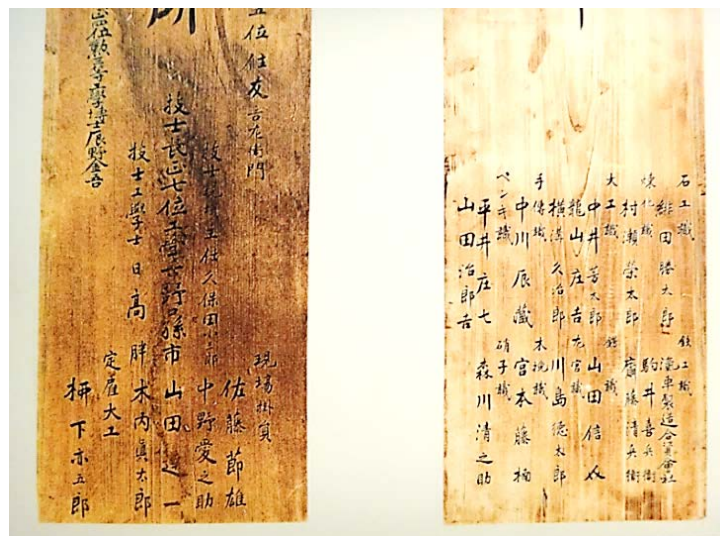


写真 2 大阪図書館棟札 表裏面

長い間、日本のステンドグラスに関する資料の多くは、関東大震災および戦災等で焼失したと思われていたが、幸いなことに木内家資料は、木内真太郎により戦災時に大阪市内から大阪府大東市に疎開をして残されてきた。

大阪図書館建築現場にて野口孫市と木内真太郎の出会いがあり、野口との関わりが、日本のステンドグラス製作工場創始者と木内に結び付き、木内の活躍が、日本近代建築におけるステンドグラスの発展に繋がった。その経緯は様々な木内家資料に残されていた。

本稿は拙稿(5)と木内家資料をもとに、発見された創建当時の棟札、および詳細不明であった中央階段上部ドーム天窗ステンドグラスの新たな情報を記していく。

1. 木内真太郎について

木内真太郎は、岐阜県羽島市・旧石田村出身の尾張藩士、後藤助七の長男として、1880(明治13)年8月22日に大阪で生まれた。父親は、1875(明治8)年大阪安治川の廻船業、四代目木内喜兵衛の養子となり、五代目木内喜兵衛として廻船業・貿易業・毛布製造業を営んでいた大阪の事業家であった。1886(明治19)年6歳、木内は、東成郡公立玉造小学校に入学するも馴染めず通わなかった。木内は、鯉坐橋、白髪橋、土佐稲荷境内等を遊び場として過ごし、勉学は土佐稲荷神社神官等に中庸や漢書(素読)を習った。

1889(明治22)年9歳、大阪市西区西長堀4丁目143番地に転居。1890(明治23)年10歳、木内は淡路町藤澤南岳主宰泊園書院(6)に当時、最年少で入塾し漢学を学ぶ。

1891(明治24)年11歳、父親の知人、旧薩摩藩出身で日本銀行に務めていた東京日本橋蛸壳町に住む中山尚之介(7)の元に預けられ、日本橋の久松尋常高等小学校に通う。中山家の生活は、夫妻と幼い子供二人、お手伝い二人に歳上の書生と木内であった。尚之介の



写真3 明治34年日本生命本館上棟式

下段左木内真太郎、右上山本鑑之進

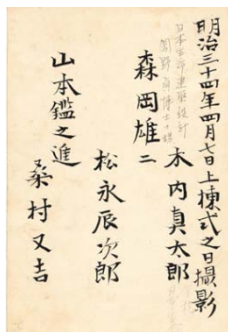


写真4 同3の裏面

木内自筆

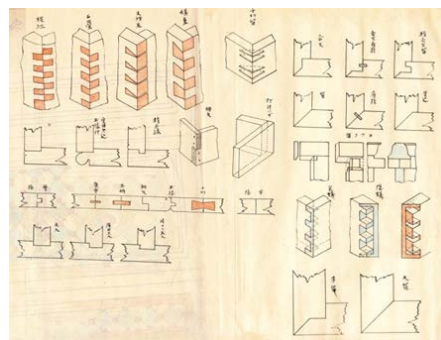


図1 製図練習

大阪商工学校時代か

妻、富子からは武家のしつけと教養を習い、出入りの旧薩摩藩士からは「天地正大気」「日本外史」「唐詩撰」等を教わった。木内は「人生の自立をここで学んだ」と手記に記し漢学塾にも通った。また木内は、漢詩を詠むのを得意とし、生涯多くの漢詩を書き残している。明治 40～41 年頃、木内は、葵橋にあった白馬会洋画研究所(8)に通い、絵画を学んでいた。画友岸田劉生の銀座にあった自宅を訪ねた思い出、および宇野澤辰雄から依頼され制作した神田の教会のステンドグラスは劉生の絵ではないかと懐かしむ気持ちを詠んでいる(9)。

七言絶句 懐劉三生（3種の内3番目） 昭和 41（1966）年 木内作詩

『橋畔聖堂素外觀中兄好求碧与円東面階窓発多彩劉子装意将可看』

1893（明治 26）年 1 月、母の逝去により大阪に戻る。同年、父の事業の失敗から家族離散となる。一人になった木内は、父の知人を頼り船舶を乗り継ぎ北海道の流浪を経て関西に戻り船舶機関長等のボーイに従事した。16 歳になっていた木内は、父親のいる釜山に移り廻船問屋にて働いた。木内は仕事である時は陸路で朝鮮半島内をまわり、ある時には海路で釜山と大阪を往復したという(10)。

1900(明治 33)年 19 歳、木内は徴兵検査のため日本に帰国し、大阪簿記学校へ半期通い商業簿記、会社簿記、工業簿記を習う(11)。同年 9 月、木内は当時日銀名古屋支店長であった中山尚之介に身の振方を相談し、中山の妻の妹、房子(12)の夫である山本鑑之進(13)の働く建築現場の日本生命保険株式会社（以下、日本生命本館）に就職を決めた。

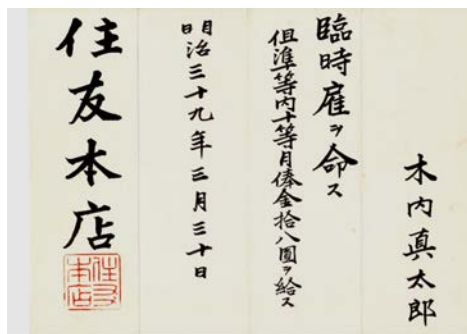


図 2 住友臨時建築部辞令



写真 5 木内の住友入社時か

1901(明治 34)年 3 月 1 日、日本生命本館（中央区今橋、明治 35 年竣工現存せず）に未経験で工事現場係に従事する。この現場は、設計指導・辰野金吾、設計・関野貞(14)、顧問・片岡安(15)であった。筆頭工事係の鑑之進（写真 3）は、身内に等しい木内を監督助手として配下に置いた。木内は、煉瓦積、屋根スレート葺き、塗装工事等を中心とする監督業を基礎から習い、夜間は関野貞の甥、森岡雄二（写真 4）から製図技法の教えを受け昼

夜休むことなく働いたことを〈昔の昔〉に記している(16)。

1902(明治35)年6月21歳、同社本館竣工落成に付き、建築顧問・辰野金吾、技師長・野口孫市、技師・日高胖等が在籍する住友臨時建築部に入社した木内は(写真5)、大阪図書館建築工事現場係に従事した。同年10月、木内は住友に勤める傍らこの年、平賀義美(17)が創立の大阪私立関西商工学校予科(第一回生)に入学し、夜学で建築(図1)を学んだ。翌年7月に修了し、同校本科へ入学するも1904(明治37)年1月病気を理由に中退した。同年2月28日、住友図書館新築落成につき住友を退職し、同年3月5日京都市下京区烏丸通り、第一銀行京都支店建築工事(設計、辰野葛西事務所)の建築係に従事した。

明治38(1905)年1月31日25歳、木内の陸軍手帳によれば、陸軍に補充召集され第二補助輸卒隊二補充兵として清国(中国)へ向かい、翌39(1906)年2月22日帰着し同年3月2日除隊している。木内は、同年3月30日付で再び、住友本店臨時雇い(図2)として再就職した。監督久保田小三郎、施工鴻池組の住友鋳工場の現場に配属され、南区清水町(現大阪市中央区東心斎橋)から通った。

表1 木内真太郎の略歴年表

西暦	年月日	年齢	事柄
1880	明治13年8月22日		大阪の廻船業木内嘉兵衛の養子となった尾州藩士、後藤嘉兵衛の長男として生まれた。
1891	明治24年3月	10歳	父親の知人、日本銀行事務主任、薩摩藩士中山尚之介宅に奇遇。
1893	明治26年	13歳	母親危篤(その後逝去)のため帰省。
	～		父親破産。父の知人の廻船業者を頼り一人北海道を流浪。
			関西に戻り船舶のボーイに従事。
1896	明治29年	16歳	父親の住む釜山に居を移す。
	～		廻船業に従事し日本を行き来する。釜山の小学校(夜間3年)に通い朝鮮語を習得。
1900	明治33年3月	19歳	徴兵検査のため帰国、大阪簿記学校入学。
	～		商業簿記、会社簿記、工業簿記を半年間学ぶ。
1901	明治34年3月1日	20歳	中山征之介の関係から、日本生命大阪本社新築工事、山本鑑之進筆頭工事係の工事現場係に従事。 (設計指導辰野金吾、設計関野貞、顧問片岡安)
1902	明治35年4月	21歳	同工事新築竣工に付き解雇。
	明治35年6月		住友臨時建築部、住友図書館(大阪府立中央図書館)建築工事現場係に従事。 (野口孫市設計、日高胖、久保田小三郎現場主任、石材は伴俣)
	明治35年10月		大阪市立関西商工学校予科 ^{注1} (夜学)第1期生入学。
1903	明治36年7月	22歳	同校予科終了、本科病気にて退学。
1904	明治37年2月28日	23歳	大阪図書館(現大阪府立中之島図書館)新築落成にて住友臨時建築部退職。
	明治37年3月5日		第一銀行京都支店建築工事建築係に従事、辰野金吾は毎月1回来場。 (設計辰野、葛西事務所、現場は桑村竹三郎と木内の2名、請負は京都清水組)
1905	明治38年1月	24歳	同行京都支店、軍隊徴集のため解雇。
	明治38年1月	24歳	陸軍第二補助輸送隊補充兵として清国へ。
1906	明治39年3月2日	25歳	帰国後除隊。
	明治39年3月30日	25歳	住友臨時建築部へ再就職、久保田小三郎現場監督の住友鋳鋼所の建築現場に従事。
1907	明治40年3月	26歳	野口孫市の勧めでステンドグラスの道へ。宇野澤辰雄の工房、東京芝区新銭座に居住。
	～		これ以降、木内の業績は別章にて。
1908	明治41年	27歳	菱橋白馬会に入会し岸田劉生等と絵を学ぶ。
1912	大正元年10月	32歳	宇野澤組ステインド硝子製作所を東京東京市芝区廣町にて別府七郎と設立、山本鑑之進の出資あり。
1913	大正3年12月	34歳	宇野澤組ステインド硝子製作所大阪出張所開設、大阪市南区末吉橋通にて。
1922	大正11年	42歳	宇野澤組ステインド硝子製作所終焉、大阪市南区天王寺南河掘町にて 瑠光社に名前を改める。
1942	昭和17年	62歳	大阪府大東市寺川5丁目に色ガラス類、道具類、デザイン画、資料等、家族とともに疎開。
1968	昭和43年11月18日	88歳	孫の木内保英に技術を伝え2代目瑠光社を託し逝去

注1: 月日が判明の場合は満年齢を記し、不明の場合はその年を満たすものと仮定し満年齢を記す。

明治 40 (1907) 年 3 月末、木内は建築現場係からステンドグラスの職へ移る。以後、木内のステンドグラスの業績は、表 3 を参考。なお木内真太郎の業績とは木内自身がデザイン、制作したものだけでなく、木内が組織の代表として請負って製作、統括したと考えられる作品を含めている。

2. 山本鑑之進、宇野澤 (山本) 辰雄について

木内と同居であった玲光社(18)二代目(故)木内保英(19)の妻は、生前の木内から、「鑑之進さんには足を向けて寝られない」と鑑之進の逸話を再三聞いている。鑑之進は建築業界へ自分を頼って来た木内を、公私ともに面倒をみていたことが木内家資料から分かる。以下、鑑之進については、山本秀雄著(20)『源流をたずねて』を主に参考にした。



写真 6 山本鑑之進



写真 7 宇野澤辰雄

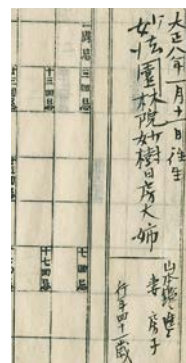


図 3 木内家過去帳

1864 (元治元) 年 1 月に阿部藩留守居役山本晴次の次男として江戸に生まれた鑑之進は(写真 6)、維新後に阿部藩事業の一環として誠之小学校建設、区画整理といった西片町(21)の街づくりに携わった父晴次を手伝い、その経験から建築に興味を持った。築地工手学校(現工学院大学)に入学し、1889 (明治 22) 年に卒業(一期生)した。翌年 26 歳の鑑之進は工手学校時代の恩師辰野金吾によって、日本銀行本店新築工事の工事主任(主人)を任せられた。当時の日銀建築部(22)には、後に事務主任を高橋是清から引き継ぐ中山尚之介が在籍していた。1896 (明治 29) 年、鑑之進は中山の妻の妹、房子と結婚し、さらに同年辰野の指示によって他の弟子達と共に、関西での仕事に従事する。

明治 35 年 5 月鑑之進は住友臨時建築部に入部する。明治 44 (1911) 年、鑑之進は所属していた住友臨時建築部を辰野が辞するのを契機として一緒に辞め、請負として独立し、「山本鑑之進工務店」として多くの建築に携わった。

晩年は 1919 (大正 8) 年 1 月妻、房子を亡くし同年末、病に倒れ翌年秋にはすべての業

務を整理して、鑑之進のもとで働いていた藤木正一（藤木工務店創始者）に後を託し引退した。療養先は鎌倉の中山尚之介別邸であった。関東大震災で罹災した後、高田馬場の中山尚之介宅隣地に居を構え、1924(大正13)年11月に生涯を終えた(享年61)(23)。

中山尚之介を介して繋がる山本鑑之進と木内の関係は強く、真太郎は木内家の江戸期から連なる過去帳(図3)に鑑之進の妻、房子(24)を載せ吊っている。身内同然の人間関係が形成されていたことが推測できる。

鑑之進の実弟、宇野澤(山本)辰雄(写真7)は1867(慶応3)年、父晴次の三男として江戸に生まれた。1882(明治15)年、東京職工学校(現東京工業大学)の機械科を第一期生として卒業。1886(明治19)年、バックマン貸費生としてステンドグラスおよびエッチング技術習得のためドイツ留学し、1890(明治23)年1月帰国した。辰雄は日本初のステンドグラス製作所を開設したが、時節が悪く多忙な仕事には至らず明治32(1899)年には、「宇野澤組織工所」(25)を創設して機械製造業も始めた。明治40(1907)年頃からステンドグラスの仕事が増え始め木内らの活躍も始まるが、妻を早くに亡くしたこともあり、1911(明治44)年6月辰雄は鎌倉にて病氣療養の後、逝去(享年44)した。

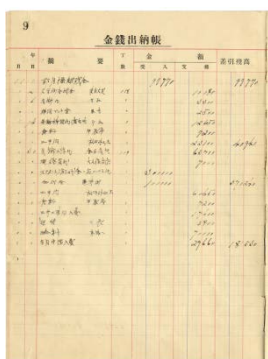


図4 〈出納帳〉

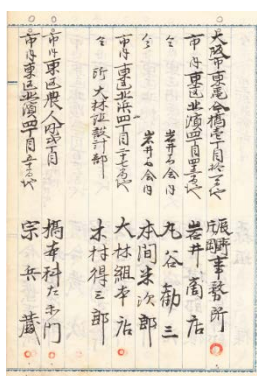


図5 〈姓名帳〉

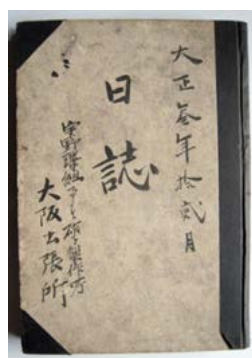


図6 〈日誌〉

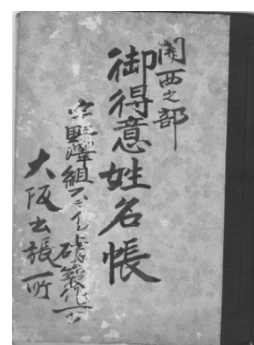


図7 〈姓名帳〉



図8 A4サイズに仮置きの小さなデザイン画類



図9 (図4~9木内家資料) 図8と同様

3. 木内家資料の書誌

木内家資料一覧(表2)に表した木内家資料とは、すべて木内真太郎が残した資料である。表紙を付けて製本され、年月日を記して一日ずつ細かい事項が書き記された〈日誌〉〈出納帳〉のような資料もあれば、一つずつの作品のデザインが記された図面やデザイン画の類もある。前者が正確な情報を記した一次資料であることは、その内容を詳細に分析した拙稿(26)にて明らかとなっている。後者は、同時に記されている年月日、建築名、寸法値および但し書きなどの筆跡が木内自身のものであること、宇野澤組や玲光社の印が押されている物があること、さらに使われている紙質や図の体裁などの一致により、木内自身が関わった一連の制作品についての資料であると判断できる。

木内家資料は、『日誌』(図6)(以下〈日誌〉)、『関西之部 御得意姓名帳』(図5、7)(以下〈姓名帳〉)、『金銭出納帳(抜粋)』(図4)(以下〈出納帳〉)、9.『自己記 感想』(以下感想)、10.『昔の昔』(以下昔の昔)、11.デザイン画、型紙、図面等(以下デザイン)等である。なお、残された木内家資料は、主に関西の部であり、あったであろう関東の部は、木内の経営が関東と分離したことに加え、関東大震災および戦災もありほとんど残されていない。

表2 木内家資料一覧

	資料名	記載内容	作成時期	サイズ 縦×横 mm	記号
1	『日誌』	宇野澤組ステインド硝子製作所大阪出張所	大正3年12月1日 —大正5年12月27日	231×160	〈日誌〉
2	『本支間製作品出入帳』	宇野澤組ステインド硝子製作所大阪出張所	大正4年6月14日 —大正5年1月25日	232×160	〈出入帳〉
3	『小口金銭出納簿』	宇野澤組ステインド硝子製作所大阪出張所	大正3年12月1日 —大正4年7月31日	233×160	〈出納簿〉
4	『製作原料品受拂簿』	宇野澤組ステインド硝子製作所大阪出張所	大正3年12月1日 —大正4年8月17日	233×160	〈受払簿〉
5	『関西之部 御得意姓名帳』	宇野澤組ステインド硝子製作所大阪出張所	(大正3年12月1日—)	233×160	〈姓名帳〉
6	『(資本金原簿)』	—	大正7年1月4日 —大正12年4月	333×225	〈原簿〉
7	『仕譯日記簿』	—	大正7年1月4日 —昭和2年2月5日	333×225	〈仕訳簿〉
8	『金銭出納帳(抜粋)』	—	大正5,8,9,10,12-15年 昭和3,5年の一部	333×210, 264×198	〈出納帳〉
9	『自己記 感想』	右記期間の日記およびそれ以前の断片的記録	昭和38年2月5日 —昭和38年4月30日		〈感想〉
10	『昔ノ昔』	明治13年—明治38年の記録	(昭和)38年4月20日—		〈昔ノ昔〉
11	デザイン画・型紙、図面等	実寸型紙、デザイン画を整理したスクラップ帳4冊、その他、千点以上	—		〈デザイン〉 〈型紙〉 〈図〉
12	メモ、写真、カタログ等	木内自筆メモ、製作品写真、パンフレット、カタログ他	—		〈その他〉

本文中のサイズは(縦×横、単位はmm)を基本とする

4. 大阪図書館 〈昔の昔〉(27)から

4-1) 住友へ

明治 35 (1902) 年 21 歳、最初の現場である日本生命本館新築工事が竣成し木内は、2か所の工事現場から職を選ぶことが出来た。〈昔の昔〉には「先達皆様のご厚情で行き先が二か所御座いました。(中略) 一つ片岡安博士の建築事務所設計、三十四銀行新築、今一つ(中略) 住友家より寄贈の、現存外部総石造である何れに参りましても結構であります。(中略) 私は図書館に就職することに極めました ママ」と記され、また「銀行とは違った美的が多くあると知ったためと全部石造というのも経見(筆者注、経験)を得られるのでママ」と綴り木内の大阪図書館新築現場への志望動機が雇用条件ではなく、美的な感性と石造技術習得であったことが推測できる。

木内は、廻船業から建築業に移り始めて体験した監督の仕事および製図作業から、建築に強い興味と魅力を感じていた。〈昔の昔〉に「石造に銀行と違う美的を感じる」と記したことに集約されるであろう。さらに住友臨時建築部に入部当時の〈自己記〉には「現場主



写真8 明治 35、36 (1902 または 1903) 年頃か 住友臨時建築部 (木内家資料) 前列左から 3 人 目野口孫市、4 人目日高胖、中列左から 2 人目 中野愛之助、3 人目山本鑑之進、4 人目森岡雄二、後 列右から 3 人目木内真太郎

任は元百三十七銀行（筆者注記、百三十銀行）の主任で阿る久保田小三郎(28)さん 石材担当は大阪停車場石造の関係で阿る伴倬さん 鉄材は佐藤節雄さん 煉瓦は中野愛之助さん で、其外ニ会計山田建一さん 木材は主任自らと云ふ事ニな里升が石を除く外は全員の監督で阿る 住友臨時建築部ニ約四十名務めて居り時に転任の人も出来ます 須磨住友別邸又銀行地方支店など数あ里升ので技手陣の入替も出来ます 最後の一人迄居りましたのは私で時ニ主任久保田さんが見廻りニ来ル事になった ママ」とある。木内の記述から現場係の内容を以下にまとめてみた。

現場主任 —— 久保田小三郎（木材兼任）
石材担当 —— 伴 倬（大阪停車場石造現場）
鉄材担当 —— 佐藤節雄
煉瓦担当 —— 中野愛之助
会計掛 —— 山田達一

石を除く他は全員で監督をしたと記されているところから、木内は経験がまだ浅く主任および担当ではない。すべてをこなす現場係員であった。

記載部分を読み下せば「外部の石裏になる内部には、煉瓦を以て積あげられ、壁厚に尺三寸五分、煉瓦に致しまして三枚壁で有ります。内部の中心部丸型も同様であります、四隅は五枚厚さ四尺の処も有ります。石の積み重ねは二箇所に丸穴を掘り、五寸の時二分の丸ボルトを用い硫黄を以てうずめ、重ね合せに鉛を加えて目地の平均を見ることになり、煉瓦との取り合わせにはトンボ付き引き金物を使用します。石の積み重なる部分をならしおなじ高さ迄煉瓦積をいたし、建物に廻り積をいたします。石には一個ごとに番号が記してありまして図面と照合されますので石の定席は分かりやすい。私が参りました時は、一階廻り鉄物嵌込みの窓廻り、すなわち大島石の処は北を除いて出来て居りました」と克明に記憶を記している。木内は前任の職場である日本生命大阪本館において現場係として全ての現場監督業を体得しており石材、ペンキ塗り、煉瓦積み等のほとんどの作業工程を克明に同資料に記している。大阪図書館現場には1階の石組の途中から入っているが、現場および人間関係等の環境は木内の穏やかな性格もあって恵まれていたようだ。

さらに読み下しを続けて「茲も真に居心持ちよい現場で一同和気あいあいとして仕事は完成しました。ここでは石に関する研究が出来ました。彫刻も構内に陣取って毎日行われ

で見廻りされます。内部造作は日本生命本館と同様である。ドーム建築の構造が少し違うだけである。」と記している。他にも建築現場の手筈、工程が図入りで生き生きと記され、その当時の工事形態の詳細が分かる。

写真 8 は建物の左手入口に掲げられた看板に、住友臨時建築部事務所と記載され、中之島の住友本店構内の木造建物に建築の事務所があったのが分かる。事務所前の集合写真は、これまでの研究では年代不詳とされている。しかし木内家資料にある当時の各種写真を見比べると、木内の着物姿と顔の幼さから住友臨時建築部に入部したての明治 35、6 年頃と推測できる。

4-2) 建設現場の出来事

木内は手記に「大阪図書館現場で 3 回厄難に遇った」とも書いている。読み下してみると「第一回は現場 2、3 階の処で煉瓦積ドーム廻り監目中、石工と煉瓦工の喧嘩が発生致したので、引分の仲裁に立回りましたときに踏み外して落ちたのです。地面迄 22 尺あります。途中で足場丸太につかまり助かりました。腕を強く打ちましたが軽い怪我で済みました。第二回目、北側中央窓の下地上に居りましたときに、石工の過ちで楯石約 170 貫を二階窓より落としました（その石は）足場丸太のそとへでました。本当に危機一髪でありました。私の左の肩と一寸位の離れでありました。冷や汗三斗の思いをいたしました。第三回目は三十六年の十月ドーム銅葺屋根に雨漏れの個所がありましたので調べに屋上に上りました。雨中全裸で一時間以上立ち廻り三か所程場所を調べて降りました。（中略～筆者注記、身体の異変を感じ）十六日阪大の市村医師（筆者注、市川）(29)の自宅へ参り診

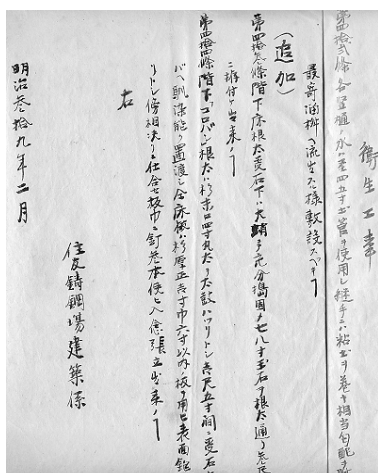


図 10 明治 39 年住友鑄鋼場木工上新築仕様書

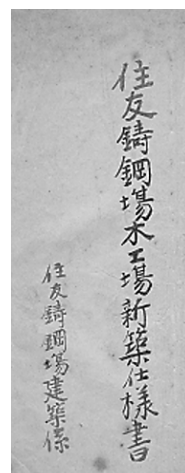


図 11 同仕様書表書き

察を受けましたところ、病原は腸チフスで既に手遅れと診断された。その十月十七日は祭日であり病院には当直医がいましたが、住友技師長野口博士のお友達でありました桃山病院院長増山正信さん(30)が野口技師長のお取り計らいで午後一時頃来院され特別の手当保護を受け後、出血が止まりました。(～中略、療養後現場に戻って) 其様な訳で私一人が図書館にただ一人留守居して居ましたのです。犬走り廻りの石を据付けたり鎖を張ったり内部便所の水漏れを直したり諸々のよごれを除いたりして過ごした。他日、阪大の市村博士(筆者注、市川)は桃山病院院長に就任されましたが腸チフスに罹られて天上された。生命は全く神の手のものと思われます(略～) 桃山病院入院の時野口技師長と増山博士との交流が無かったとしたらこれが人生の運命というのでしょうか」と伝染病の過酷さを述べ、木内は自分の運命の流れに感謝をしている。

病後の体調が万全でなかった木内は、大阪図書館竣工後の引き渡しまで一人で現場保守をした。掃除、片付け、保守等の体力を必要としない軽作業が妥当と住友から擁護されていたようだ。腸チフスに罹ったことが、木内真太郎履歴書(図 13)に記載された「大阪私立関西商工学校本科の中退」理由であった。

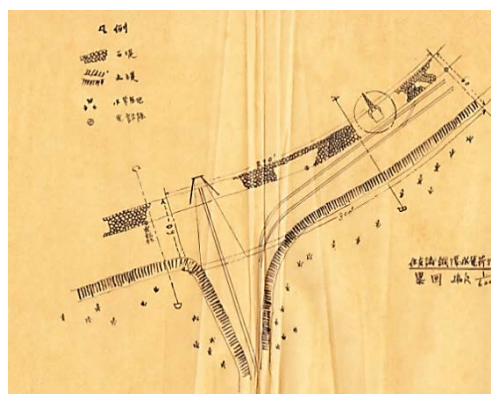
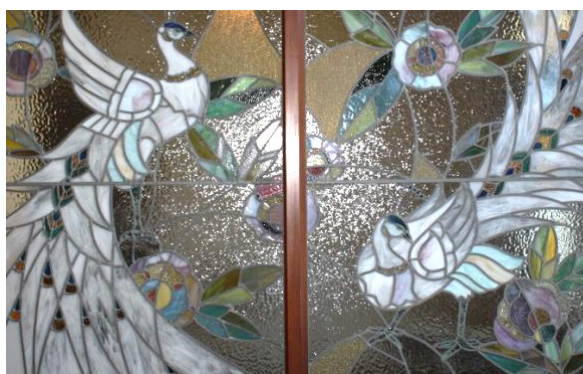


写真 9 鴻池本店玄関横、引き違い窓ステンドグラス 図 12 木内真太郎作図(住友鑄鋼場水運荷物図面)

3) 現場主任の久保田小三郎

1896(明治 29)年竣工、辰野金吾設計、日本銀行本店現場には、鑑之進に加えて久保田小三郎も建築技師として日本銀行建築部名簿抜粋(31)に記載がある。久保田は工手学校(第 3 回卒)にて鑑之進の後輩(32)であり、鑑之進と同じく辰野の建築物に多く関わった。久保田は木内より 2, 3 か月早く、明治 35(1902)年 2 月に住友臨時建築部に入部した。

1906(明治 39)年、住友関連工事である、住友鑄鋼場島屋町移転工事(図 10~11)では、久保田が現場主任そして木内が現場係であった。木内家資料には木内真太郎が描いた住友

鑄鋼場(図 12)の製図(33)が 5 枚ある。木内の住友における最後の建築業現場としての図面は長く手元において置きたかったのであろう。この種の図面資料はこれのみが残っている。

その後、明治末から大正 3 年にかけて久保田は大阪伝法町の鴻池本邸(34)を設計し、木内は同邸に金彩の社章紋入りステンドグラスやアールヌーボーのデザインが入ったステンドグラスを制作している(写真 9)。

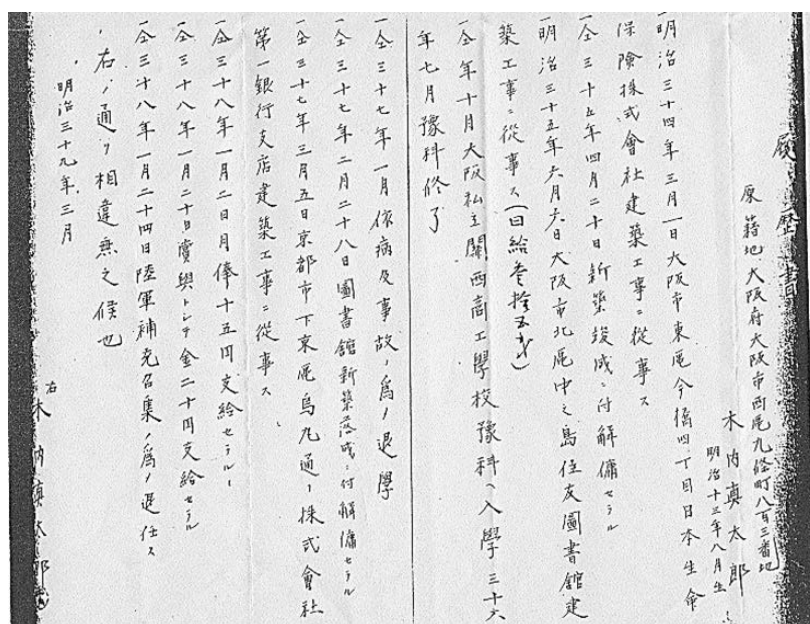


図 13 明治 39 年木内自筆履歴書(35)住友臨時建築部(鑄鋼場)再就職時(木内家資料)

4-4) 野口孫市との関わり(36)

1894(明治 27)年、野口は帝国大学造家学科を成績優秀で卒業後、大学院に進み耐震家屋の研究をしている。卒業後は逓信省を経て明治 32(1899)年住友に入り、翌年、住友臨時建築部が設けられ技師長となる。住友の近代建築を担う役割を背負う野口は、住友から 1 年間の欧米視察の機会が与えられた。成果は大阪図書館および同時期に設計の住友須磨別邸(明治 37 年竣工)において如実に現れ高い評価を得ている。

野口の欧米視察時の資料は、少なく詳細不明な部分が多い。しかし木内家資料から前述した野口のドイツでの友人、増山正信桃山病院長のドイツ留学時期(37)について調べた結果、野口の欧米外遊の時期と合致するドイツの都市があった。ベルリンである。野口はドイツのベルリンにおいて、建築に関する情報を得る目的で滞在中、医学を研究していた増山氏と交友をもったと推測する。

明治 40 (1907) 年、26 歳の木内は、住友で働きながら夜間の専門学校で建築も学んだ。現場では石造建築の石組手法に芸術性を感じ、製図作業もこなした。徐々に監督業に喜びを覚え業務に精通し始めた時期、野口から聞かされた転業の薦めは青天の霹靂であったろう。木内の手記〈感想〉(38)には「住友技師長野博士のお話によって今日も継続してきます装飾硝子を将来の仕事とする為に東京に転じた ママ」とあり、同年 3 月末から宇野澤辰雄のもとへ転職したことを淡々と記している。

当時、野口はステンドグラス需要の将来図を木内に示されたに違いない。辰野金吾、山本鑑之進等の多くの建築家が関西に事務所を設けた時期である。関東のみならず、彼らの設計した近代建築物にはステンドグラスが嵌め込まれる機会が増え始めていった。実際、木内が転業した翌年、ステンドグラス関連資料は残っていないが、野口の設計した須磨の鶴崎平三郎邸にステンドグラスが嵌め込まれている。その他にも野口はステンドグラスを嵌め込んだ建築を設計している。また野口の逝去後、部下の日高胖が設計した住友本邸(39)を始めとする住友家の諸建築に、木内がステンドグラス作品を制作したことが、新出の資料から明らかとなった。木内が住友臨時建築部から転職以後、野口、日高らとステンドグラス制作で絡んだことを鑑みれば、転職を勧めるにあたり、野口は木内へのステンドグラスの発注を約束していたとも考えられる。

その後、木内の関わったステンドグラス作品は、表 3 に示した。

5. ドーム天窓について

本稿執筆調査から新たな情報を入手した。住友臨時建築部創成期、建築顧問辰野金吾、技師長野口孫市等を配した時期の須磨別邸、大阪図書館建設工事に際しての支出項目の中に、下記のような硝子に関する記述(40)が認められた。

明治 37 年 2 月 6 日／「硝子板廿壹枚 森川清之助」／16.990 (円)

同 年 2 月 20 日／「丸型硝子外売点 島田硝子製造所」／15.500 (円)

大阪図書館においてのステンドグラス項目は見当たらず、棟札にある森川清之助と新出の島田硝子製造所(41)のガラスに関する支出を確認できた。

ドーム天窓(写真 10)の形態は銅製金物をドーム躯体(42)中心から釣る形状であり、天窓硝子を通して透かし見ることが出来る。島田硝子製造所の丸型硝子は、ドーム天窓中心の透明に近い薄青緑ガラスを指していると思われる。ガラスが設置してある天窓円形金枠は、同心円を 5 個描き 24 本の半径ラインが傘の骨のように中心円に向かう。ドームの裾に

つながる重要な要素だ。ドームから見る天窓は太陽にも思われ、時を刻むかのようにも感じる。外周から1、2本目同心円の間には、青色濃淡ガラスを配し、24の各間には丸型を置いている。少しの間を置き3、4本目間にも同様青色濃淡ガラスを使用し、ドーム二重屋根持送硝子棧は銅製で忍冬紋風な唐草模様を造形したステンドグラス(43)である。鉛線(棧)に半田付けを施してガラスを繋ぐ方法ではない。

博物館明治村聖ザビエル天守堂(44)のステンドグラスも鉛棧の使用はなく、鋳鉄の枠に色ガラスを嵌め込みしパテ止め施工である。当館と同様に模様の焼付技法はなく、白色の亜鉛華顔料をガラスに付着の様式である。(写真11)。

一方、大阪図書館と同時期に建設が進められた住友須磨別邸に関し、下記のような記述がある(45)。

明治35年12月8日／「ステント硝子四枚 宇野沢辰雄」／71.950(円)

住友須磨別邸ステンドグラスに宇野澤辰雄が制作をしていたことが明らかとなった。この記述から、辰雄が宇野澤組鐵工所(46)の設立後もポンプ製作とステンド硝子製作の両方を営んでいたことが判明した。同じく須磨建設物起業支出中の山本鑑之進の出張費に関し、鑑之進が12月6・7日に須磨に出張していることがわかり、兄弟が行動を共にした可能性もある。住友臨時建築部所属の鑑之進は中之島の事務所近くの現場に所属し、大阪図書館に顔を出すこともあったであろう。天窓ステンドグラスの構築に辰雄は意見を求められたことも推測される。しかしながら同資料には、宇野澤辰雄の記述は見当たらず天窓ステンドグラス製作の関与はない。棟札に名が載るガラス職、森川清之助(写真1)に、明治35年国産板硝子の製造を始めた島田硝子製造所の島田孫市の「丸ガラス納入」が確認できた。

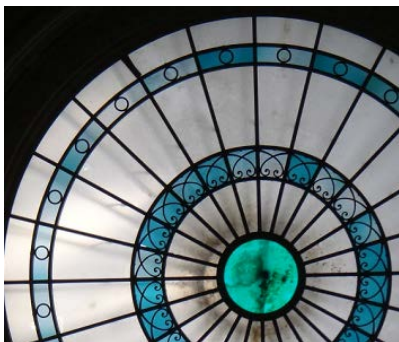


写真10 ドーム天窓中心青ガラス



写真11 ザビエル天守堂 絵付けステンドグラス

6. まとめ

大阪府立図書館（大阪図書館）創建当時の棟札が、1998年に天井下地枠上から見つかった。その棟札に名が書かれた現場係木内真太郎は、日本近代建築のステンドグラス製作に関わった制作者であることが明らかとなった。また大阪府立図書館の美しい天井ドームのステンドグラスに木内真太郎および日本のステンドグラスの祖、宇野澤辰雄も関わっていない。調査から日本で型板ガラス製造を創始した島田孫市の関与が判明した。

住友臨時建築部技師長、野口孫市設計の大阪図書館建築現場は、木内真太郎が現場係として野口と出会い、野口の薦めで木内は、住友から装飾硝子に転職をした思いで深い現場であった。そして木内真太郎は後世に多くの作品を残した。例えば大阪公会堂のように現在、修復保存されて我々が見学可能な近代建築物に木内の作品が数多残る。

謝辞

本稿の研究を進めるにあたり木内家資料をご提示下さった玲光社三代目木内英樹氏、また聞き取り調査に何度も応じてくださいました二代目（故）保英氏妻カオルさん、閲覧、複写等のご協力をいただいた住友資料館職員の皆様、ご助言を下さった同館副館長末岡輝啓氏、名古屋工業大学大学院教授河田克博氏、岐阜工業高等専門学校准教授清水隆宏氏、名古屋大学名誉教授飯田喜四郎氏、多大なご協力を頂いた大阪府立中之島図書館員本多まつ氏、大北智子氏、小笠原弘之氏ほか図書館職員の皆様、また調査に快く接していただきました関係各所の皆様に深く謝意を表します。

参考文献

- (A) 『中之島百年—大阪府立図書館のあゆみ』大阪府立中之島図書館百周年記念事業実行委員会 2004.
- (B) 金田美世, 清水隆宏, 西尾雅敏, 河田克博. 宇野澤組ステインド硝子製作所の設立と終焉 : 木内真太郎の関与を中心として 『日本建築学会計画系論文集』 2010. 5, 第 651 号, p. 1241-1246.
- (C) 金田美世, 清水隆宏, 河田克博. 「近代建築ステンドグラス制作者木内真太郎の業績 : 木内真太郎の関連資料を中心として」『日本建築学会計画系論文集』2013. 4, 第 686 号, p. 915~924.
- (D) 山本秀雄. 『源流をたずねて』 株式会社藤木工務店 平成 2 年 5 月.
- (E) 内田青蔵. 『建築工藝叢誌』復刻版 第一巻～第六巻, 柏書房, 2006.
- (F) 『大阪市立桃山病院 100 年史』 1987, 大阪市立桃山病院編
- (G) 小西隆夫. 『北浜五丁目十三番地まで日建設計の系譜』株式会社日建設計, 1991.
- (H) 坂本勝比古. 『日本の建築』「明治・大正・昭和」5 商都のデザイン三省堂, 1980.

- (I) 石田潤一郎. 『関西の近代建築』中央公論美術出版 平成8年11月15日
- (J) 古屋照治郎. 『近畿医家列伝 前編』大阪史伝会, 1902, p 二百二十～p 二百二十三
- (k) 野口英一朗. 島田孫市のガラス製造について 『日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸)』2002.8.
- (L) 宇野澤組鐵工所社史編纂委員会. 『ウノサワ 100年の歩み』宇野澤組鐵工所, 1999.

—執筆にあたり以下の文献を参考にした—

『鴻池社史(株鴻池組)』 社史編集委員会(株鴻池組) 社史編集委員会 昭和61年12月20日

『藤木工務店の五十年の歩み』(株藤木工務店 昭和45年11月21日

『明治工業史 建築編』 工學會 工學會明治工業史発行所 1930年

山本秀雄. 建築と人間の織り成す歴史と文化 『歴史に学ぶ』(株藤木工務店 平成9年11月22日

注記

- (1) 参考文献(A) 参照。本稿では大阪中之島図書館を木内家資料の呼称大阪図書館を使用。
- (2) 1854(嘉永7)年生まれ。工部大学校(現、東大工学部)教授。造家学会(現、日本建築学会)設立。作品に日本銀行本店、東京駅等。
- (3) 後述。4-4)住友家の住友吉左衛門が大阪市へ寄付をする為の図書館設計の任務を受けた。東京帝国大学造家学科卒。
- (4) 日本で最初に ステインド 硝子製作工場を設立した宇野澤辰雄の後継者木内真太郎、および別府七郎が大正元年、東京芝区廣町に創立したステンドグラス製作工場。なお「ステインド 硝子」の使用は資料に従った。ステンドグラス 制作 と同 製作 の区別は、木内に限り、木内が作品制作をしたと考えられるときは「制作」とし、組織の代表としての作品製作は「製作」と分けた。
- (5) 参考文献(B)(C)参照。
- (6) 漢学塾、木内は一番年少の塾生であり寄宿生であった。南岳と寝食をともにした寄宿生活を〈昔の昔〉に記す。
- (7) 参考文献(D) 13頁に日本銀行建築部名簿(抜粋)高橋是清と共に事務主任とある。
- (8) 明治時代後期に存在した、黒田清輝らを中心とする洋画研究機関。
- (9) 『岸田劉生』武者小路実篤著 小山書店昭和23年発行。p 167に白馬会研究所、数寄屋橋にあった教会の記述あり。
- (10) 〈昔ノ昔〉(表2)〈10〉参照。木内の手記。釜山での木内は交易業に従事し、朝鮮語の習得のために小学校夜間部に全修養3年間通った。卒業時には2人だけであった。
- (11) 木内により記載された、宇野澤組ステインド硝子製作所の各種帳簿が木内家資料には残されている。

- (12) 房子は中山家に寄寓していた木内を覚えていた。手記〈昔の昔〉より。
- (13) 後述。2.
- (14) 1867（慶応3）年生まれ。東京帝国大学造家学科卒。日本生命本館を設計、後、母校の教官となる。
- (15) 片岡直温日本生命本館副社長の養子。明治30年、東京帝国大学造家学科卒。
- (16) 〈昔ノ昔〉に「四六時中現場、此四百坪の地内より一步も外に出ません。仕事に熱中するだけである。（中略）また大切な製図の練習の為に夜間三更に及ぶ事も毎度」との記述が見られる。この時期に木内が描いた日本生命本館の建築図面も、木内家資料には多数含まれている。
- (17) 東京帝国大学出身の化学者。工学博士。
- (18) 1922（大正11）年 木内は、宇野澤組ステインド硝子製作所から「玲光社」に名称変更した。
木内は疎開し居住した大東市で逝去した。現在、曾孫が玲光社三代目を継いでいる。
- (19) 木内の孫、木内の一人娘富佐江の子。
- (20) 参考文献（D）参照。著者は山本鑑之進の一人息子、山本 ^{いち} の次男。
- (21) 現在の東京都文京区西片。
- (22) 参考文献（D）より。また、日本銀行提供の資料によると、中山の入行は明治23年1月、退職は明治38年6月である。
- (23) 参考文献（D）および、中山尚之介の孫、尚彦氏への聞き取りによる。
- (24) 木内家永代過去帳。文化6年（1806）元祖木内喜兵衛甥昭和20年2月16日（1945）娘婿の戦没まで139年間の記録。真太郎の代の縁者以外は房子一人のみ記載。
- (25) 芝区新銭座にあったステインド硝子工場、宇野澤組鐵工場共に、宇野澤家の戸籍簿によれば、宇野澤家所有の土地であった。
- (26) 参考文献（B）（C）参照。
- (27) 筆者の読み下し、および簡易な文章は（ママ）でそのまま載せた。
- (28) 後述。（4-3）
- (29) 大阪桃山病院第4代院長。在任中、腸チフスにて死去。参考文献（F）参照。
- (30) 増山正信（1868～1942）医学博士、明治30年（1897）～同33年（1900）ベルリン大学留学『大阪人名事料辞典』1913 文明社編纂参考。明治33年11月桃山病院第3代院長就任。参考文献（F）参照。
- (31) 参考文献（D）13頁に「日本銀行建築部名簿」（抜粋）に技手と記載。
- (32) 『工手学校同窓会名簿』（1993）p225.
- (33) 15トン起重機組立平面図他に3枚図面有。

- (34) 足立裕司、吉田正三らによる一連の研究がある。例えば、足立他、明治末期における新しい建築造形の動向についての一考察（旧鴻池組本店の調査研究 その1）『日本建築学会近畿支部研究報告集』昭和63年所収など。これらの中で、ステンドグラスについては「改装時に木内が製作したものと考えられる」と指摘している。
- (35) 鴻池組関係者より送付のコピー。オリジナルは住友資料館所蔵。
- (36) 参考文献（H）（I）を参考にした。
- (37) 参考文献（J）p 二百二十～二百二十三 「増山正信君」の項。フランクフルト、伯林等野口の欧米遊学と同時期の留学記録がある。
- (38) 表2 木内家資料一覧。
- (39) 表3 業績 参照。
- (40) 明治37年上半期住友本店会計課「元帳甲」図書館建設物起業支出の項（住友史料館収蔵史料）。
- (41) 参考文献（K）参照。
- (42) 写真10から透けてみる事が出来る。参考文献（G）p85 図書館仕様書鋼鉄工事 39条にドーム小屋組は鋼鉄製とある。同42条 p86 にドーム二重屋根の詳細仕様がある。
- (43) ステンドグラスの一般的な概念から鉛線（棧）およびカラフルな色ガラスの使用が無い当図書館は、ステンドグラスと厳密に言わないのではないかな…等、館内案内説明に捕捉。
- (44) パリ外国宣教会が1890（明治23）年京都に建造し聖フランシスコ・ザビエルに奉獻した聖堂。1973（明治48）年博物館明治村に移築した。筆者が修復作業に関わった。
- (45) 「明治35年下半期住友本店会計課「元帳甲」須磨建設物起業支出の項（住友史料館収蔵史料）」。
- (46) 参考文献（L）参照。

表3 木内真太郎 主な関西の業績(抜粋)

制作または資料記載年	建物名	施工地	設計等	施工、取次等	
明治40年	1907	神戸オリエンタルホテル	神戸	ゲオルク・デ・ラランデ	直営
明治41年	1908	村野山人邸	神戸	設楽貞雄	—
明治42年	1909	トーマス邸	神戸	ゲオルク・デ・ラランデ	—
明治42年	1909	村井吉兵衛邸	京都	ガーディナー建築事務所	—
明治42年	1909	奈良ホテル	奈良	辰野片岡事務所、河合浩蔵	辰野片岡事務所直営
明治44年	1911	(芝川邸)	兵庫	武田五一	—
大正元年	1912	愛国生命保険会社三階会議室	大阪	河合浩蔵	—
大正元年	1912	大浜潮湯	堺	辰野片岡事務所	—
大正2年	1913	噴泉浴場(新世界)	大阪	設楽建築工務所	大林組
大正3年	1914	三井銀行京都支店	京都	鈴木禎次、星野則保	竹中工務店
大正3年	1914	鴻池組本店	大阪	久保田小三郎	鴻池組
大正3年	1914	須磨遊園地	兵庫	—	—
大正3年	1914	神戸銀行集会所	神戸	辰野片岡事務所	竹中工務店
大正4年	1915	柴田邸	神戸	—	—
大正4年	1915	河盛勘次郎邸	堺	—	—
大正4年	1915	四十三銀行	和歌山	辰野片岡事務所	—
大正4年	1915	京都駅(交集天窓、便殿室衝立)	京都	西部鉄道管理局工務課(渡辺節)	大林組
大正4年	1915	都ホテル菱殿	京都	片岡安	山本鑑之進
大正4年	1915	片岡直温邸	伏見	片岡安	—
大正4年	1915	近江銀行	大阪	辰野片岡事務所	—
大正4年	1915	大阪商船会社	神戸	—	—
大正4年	1915	鈴木馬左也邸	神戸	—	—
大正4年	1915	神戸劇場	神戸	—	—
大正4年	1915	京都ホテル	京都	—	—
(大正4年)	(1915)	(舞子ホテル洋館)	神戸	—	—
大正5年	1916	川島織物	京都	—	—
大正5年	1916	加賀邸	京都府	—	—
大正5年	1916	久原房之助邸、天井	神戸	久原建築事務所	—
大正5年	1916	三井銀行神戸支店	神戸	長野宇平治	竹中工務店
大正5年	1916	内田信也邸	神戸	宗兵蔵	—
大正5年	1916	緒方邸	大阪	—	—
大正5年	1916	住友須磨別邸(修理)	神戸	住友営繕課(住友臨時建築部)	—
大正5年	1916	東洋紡績	大阪	辰野片岡事務所	清水組
大正7年	1918	日本商業銀行	神戸	設楽建築工務所	竹中工務店
大正7年	1918	兵庫農工銀行	神戸	設楽建築工務所、武田五一	竹中工務店
大正7年	1918	日本郵船神戸支店	神戸	曾禰達蔵、中條精一郎、徳大寺彬麿	橋本料左衛門
大正7年	1918	京都住友(鹿ヶ谷別邸)	京都	住友営繕課(日高胖)	八木甚兵衛
大正7年	1918	四本萬二郎邸	神戸	—	—
大正7年	1918	大阪市公会堂	大阪	辰野金吾、片岡安、岡田信一郎	清水組
大正7年	1918	湯浅竹之助邸	神戸	—	—
大正7年	1918	千浦友七邸	神戸	宗兵蔵	—
大正7年	1919	十合呉服店3階	大阪	竹中工務店	竹中工務店
大正7年	1918	日本郵船大阪支店	大阪	曾禰達蔵、中條精一郎、徳大寺彬麿	大林組
大正8年	1919	内田汽船会社	神戸	設楽貞雄	鴻池組
大正8年	1919	内田支配人邸	須磨	—	鴻池組
大正8年	1919	横浜正金銀行神戸支店	神戸	長野宇平治	竹中工務店
大正8年	1919	平賀義美邸(鶴の荘)	川西	鴻池組松本	鴻池組
大正8年	1919	静商店(北浜)	大阪	—	浜商店取次
大正8年	1919	京都辻邸	京都	—	京都大丸呉服店
大正8年	1919	村越邸	大阪	—	浅野商店取次
大正8年	1919	大阪市民博物館	大阪	原設計:久留正道	—
大正9年	1920	西尾類蔵邸	神戸	設楽建築事務所	旗手組
大正9年	1920	神戸海洋气象台	神戸	渡辺節	竹中工務店
(大正10年)	1921	岸本邸	芦屋	—	—
大正10年	1921	大阪市庁舎	大阪	大阪市庁舎臨時建築部(片岡安、他)	銭高組、鴻池組
大正10年	1921	(日高胖邸)	宝塚	日高胖	—
大正11年	1922	(住宅改造博覧会第6号)	箕面	薄井英隆(日本建築協会)	—
大正11年	1922	(同 片岡建築事務所)	箕面	片岡建築事務所	—
大正11年	1922	(同 横河工務所)	箕面	横河工務所	—
大正11年	1922	新町演舞場	大阪	片岡建築事務所	—
大正12年	1923	大原孫三郎邸	大阪	内藤太郎	藤木工務店
大正12年	1923	谷口房蔵邸	大阪府	担当:和田貞次郎	—
大正13年	1924	三木楽器店	大阪	増田清、本野精吾(音楽室)	鴻池組
大正13年	1924	都ホテル(新本館)	京都	片岡安	藤木工務店
大正14年	1925	住友本邸(田辺貞吉邸)	神戸	野口孫市、日高胖	—
大正14年	1925	(草鹿邸)	宝塚	小笠原鋳	—
大正14年	1925	小倉捨次郎邸	神戸	笹川慎一	藤木工務店
大正15年	1926	住友ビルディング	大阪	住友工作部	大林組
大正15年	1926	宮崎弥七郎邸	西宮	笹川慎一	藤木工務店

* 金田美世・清水隆宏・河田克博著「近代建築ステンドグラス制作者木内真太郎の業績—木内真太郎の関連資料を中心として—」(『日本建築学会計画系論文集』Vol.78 No.686 pp.915~924)より近畿圏を抜粋して作成、その後の研究で新たに判明した事項及び訂正部分を書き加えた。

* ()は著者推定。

* 年代は、ステンドグラスの制作またはその関連事項が資料で確認できる年であり、建物の竣工年と異なることがある。

* 制作品とは木内自身がデザインを担当した、または加工したものだけでなく、木内(の属する組織)が請負って制作したと考えられる作品すべてのこと。* 根拠資料は『日誌』『本支間制作品出入帳』『小口金銭出納帳』『制作原作品受払簿』『関西之部 御得意姓名簿』『資本金原簿』『仕譯日記簿』『金銭出納帳(抜粋)』『実寸デザイン(型紙)、縮尺デザイン、手記、竣工パンフレット、感謝状など。また木内家資料の詳細も記したものもある。